愛媛県美術館研究紀要　第７号抜刷（2008年９月発行）

作品紹介　月岡雪鼎筆《貴人図》

“A Nobleman with Followers” by TSUKIOKA Settei

長　井　　健
NAGAI Takeshi

作品紹介　月岡雪鼎筆《貴人図》

長井　健

はじめに

本稿では、十八世紀後半の大坂で活動した風俗画家、月岡雪鼎（一七二六～八六）[1]の新出となる《貴人図》（図1。個人蔵、当館寄託。以下「本作品」と呼ぶ）を紹介する。雪鼎は、艶麗な当世美人画や、王朝人物等の古典画題を多く手がけ、京都の西川祐信（一六七一～一七五〇）と並んで、江戸時代中期の上方風俗画の名手として人気を博した。本作品も、雪鼎の法眼期（安永七年〈一七七八〉以降、没年まで）の様式を示す典型的な古典人物画の一例として新たに加えられるものと考えられる。

作品の概要・主題について

本作品は、紙本着色、一幅の掛軸で、法量は一〇六・〇×四六・〇センチを数える。画面左下に「法眼月岡雪鼎」の款記と「姓源氏木田名昌信字大溪号雪鼎別号月岡自称信天翁」（朱文大円印）、「清如玉壺冰」（朱文鼎印）が認められる（図2）。

季節は冬、うっすらと雪の積もる屋外の情景である。左奥には雪の降りかかる梅樹が、白く小さな蕾をつけている。その右手は水辺が描かれるが、水面は氷が張り、汀には鴛鴦のつがいが羽を休めている。手前には三人の人物。左は立てる一人の貴人。その右側にはかしずく従者と童子。従者は左手に短冊を、右手に筆を持ち、何やら書き付けようとしている様子。その横で童子は硯箱を持ち、構えている。貴人は今まさに、この冬の情景を歌に詠もうとしている瞬間なのであろう。景物が描かれない余白の部分は薄墨が刷かれ、冬曇りの情景が表現されており、全体的に寂寥感が漂っているが、人物の着衣に施された太い衣文線や濃彩などにより、画面下半部に重心が置かれる安定した構図が取られる。

雪鼎と十二ヶ月図

月岡雪鼎は、近江国日野の出身。はじめ同郷の京狩野派絵師・高田敬輔（一六七四～一七五五）に師事し、やがて活動拠点を大坂に移し風俗画、とりわけふくよかで艶麗な美人画で人気を博して、一家を成した。

雪鼎は、特に法眼叙任以降、王朝文化を主題とした古典人物画を集中して手がけている。中でも「十二ヶ月図」という画題は、相当数量産されたふしがあり、同工異曲の作例が多数確認される。なお、雪鼎の十二ヶ月図は六曲一双屏風の各扇に一ヶ月ずつの人物・景物を貼り交ぜた形式が基本と見られるが、本作品も、おらくこの手の十二ヶ月図のうち十二月の一図のみが、後世に掛幅として改められたものと考えてよい。本作品と同じ法眼期に描かれた代表作「十二ヶ月図屏風」（滋賀県立琵琶湖文化館蔵）のうち十二月を描いた一図（図3）と、情景や人物構成が類似し、また後景に描かれる梅（早梅）と鴛鴦（水鳥）が、いわゆる「定家詠月次花鳥歌絵」のうち十二月の景物と一致するからであ

図１　月岡雪鼎《貴人図》　個人蔵（愛媛県美術館寄託）

図２　落款・印章

る。歌とは次の通り。

花「色うづむかきねの雪の花ながら年のこなたに匂ふ梅がえ」
鳥「ながめする池の水にふる雪のかさなる年ををしの毛ごろも」[2]

鎌倉時代の歌人、藤原定家（一一六二～一二四一）が、後仁和寺宮の企画のもと、建保三年（一二一四）に詠進した月次花鳥歌は、各月にふさわしい花と鳥をそれぞれ詠み込んだ十二首ずつ計二十四首の和歌のこと。その後、一旦は中絶したが、近世初期の王朝趣味復興の機運とともに再流行した。

この定家詠月次花鳥歌は、寛文期（一六六一～七二）から元禄期（一六八八～一七〇三）頃にかけて、狩野探幽、土佐光起、住吉具慶ら当時の主力画人たちによって、集中して絵画化されたことが現存作品から分かり、またこの他にも「畠山匠作亭詩歌」[4]など中世月次歌が再び隆盛する中で、これ以後多くの十二ヶ月図が作られた。なお、十二ヶ月図は時代や流派によって多彩な展開を見せるが、例えば狩野派や琳派は、人物を描かず各月に詠まれた景物のみを抽出して描くが、土佐派の場合は、人物も共に描いて歌意を意識するなど、各々で独自の傾向が見られるという。[5]その中で、雪鼎率いる月岡派はというと、

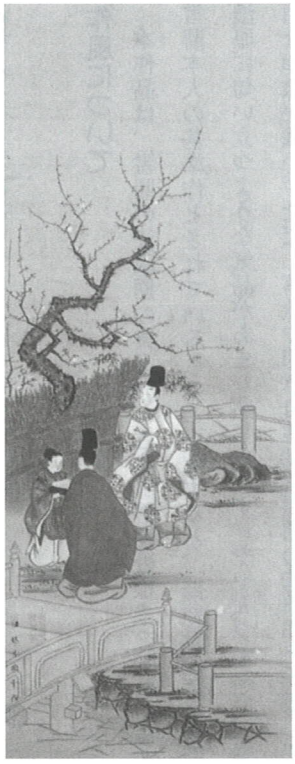

図3　月岡雪鼎《十二ヶ月図屏風》のうち十二月
滋賀県立琵琶湖文化館蔵

土佐派のように人物と景物が描き混ぜられてはいるが、風俗画派らしく人事に関心の強い景物画を好んで描いていると指摘される。[6]

琵琶湖文化館本は、定家詠月次花鳥歌ではなく、さらに古い平安期の屏風歌に基づく月次絵の図様に拠るものと考えられているが、[7]本作品の場合は、後景に鴛鴦のつがいが描かれる点から、定家の歌意に非常に忠実であると言え、一見類似する図様でも、歌意によって描き分けがなされていることが分かる。また、琵琶湖文化館本の図とほぼ同図様で、水面に氷が張らず、水流に変更しただけの息子雪斎の作品（関西大学図書館蔵、図4）もあり、歌意の忠実な描出からは離れた月次絵が派生的に量産されただろうことは想像に難くない。類型的と言われることも多い雪鼎の十二ヶ月図だが、このように微妙な差異ながらいくつかのバージョンに分けられるということは、人気とともに流派の体制が拡大しつつあるこの頃、十二ヶ月図の広範な需要に応じるために、さまざまな図様をストックしていた結果と考えてよいだろう。

ただし、雪鼎の十二ヶ月図のうち、定家詠月次花鳥歌絵の図様に拠っているものは少数派のようで、他にはボストン美術館蔵の「月次花鳥風俗図屏風」が挙げられる程度である。雪鼎の十二ヶ月図の場合、定家詠月次花鳥歌絵は採用しなかったと考える向きもあるが、[8]本作品の出現により、数は少ないが、最も

図4　月岡雪斎《観梅人物図》
関西大学図書館蔵

オーソドックスな定家詠月次花鳥歌絵も、需要に応えて、相応に手がけていたと考えるべきであろう。

作風について

本作品は、雪鼎の法眼期の典型的な古典風俗画の様式を示している一方で、雪鼎本人の基準作とされているものと比較すると、彼独自の芯の強い線描と、濃厚に匂い立つような気品があまり感じられず、やや大づかみで、柔らかく淡白な印象が強い。ただし落款や印章自体は法眼期の基準作と比較して、問題はないものと思われ、広い意味での雪鼎作品として誤りではない。特に十二ヶ月図については、同趣のものが、かなり量産されているという状況から見て、子の雪斎も含め、基本的にはこの派の十八番的な看板商品として、工房制作が行われていたと考えるべきであろう。絵の部分に雪鼎本人がどの程度関与するのかは、依頼主の問題や作業の進行状況によって様々だろうが、いずれにせよ最終的には雪鼎自身が、落款印章を付すという作業が想定できる。[9]

なお、伊藤香氏のご教示によれば、本作品のように「姓源氏木田名昌信字大溪号雪鼎別号月岡自称信天翁」「清如玉壺冰」の両印を併用する例は、今のところ「大坂十二ヶ月風俗図屏風」（大阪歴史博物館蔵）と「月次花鳥風俗図屏風」（ボストン美術館蔵）のみで、例が少ない。特に大阪歴博本は、従来雪鼎の代表作として挙げられてきたものゆえ、二印の組み合わせは、あるいは雪鼎本人の筆に限定されるものかとも思われたが、本作品に関しては、雪鼎本人の筆と見ることは難しいので、印の組み合わせが、そのまま作品の質（基準作かどうか）を判断する第一条件とすることは、現時点では出来ないだろう。

以上、本作品は、月岡派の工房制作の様相の解明を含め、今後の雪鼎研究の進展の新たな資料として加えられるものと位置づけ、ひとまず筆を擱きたい。

註

（1）月岡雪鼎の生没年については、近年、山本ゆかり氏により発見された『御室御記』の記述に基づき、新説が提示された。本稿でもこれに従う。①山本ゆかり「月岡雪鼎・磯田湖龍斎への僧位叙任について―『御室御記』に関する報告」『浮世絵芸術』一三二、一九九九年。②同「月岡雪鼎試論―古典をめぐる絵画制作の再検討」『美術史』一五五、二〇〇三年。

（2）『新編　国歌大観』第三巻　私家集編Ⅰ　歌集、角川書店、一九八五年

（3）「定家詠月次花鳥歌絵」については、以下を参照。西本周子「尾形乾山筆「定家詠十二ヶ月図屏風」について」『国華』一〇四三号、一九八一年。武野恵「近世における定家詠月次花鳥歌絵の展開―吉村孝敬作品を中心に―」『MUSEUM』四一四号、一九八五年。『月次絵十二ヶ月の風物詩』展覧会図録、滋賀県立近代美術館、一九九五年。下原美保「元禄期における定家詠月次花鳥歌絵についての考察―光起本、探幽本、具慶本を中心とした比較―」『美術史』一四六、一九九九年。

（4）「畠山匠作亭詩歌」は嘉吉元年（一四四一）成立。「定家詠月次花鳥歌」同様に、中世以降途絶していたが、やはり元禄期頃に復興したと考えられる。絵画化されたものには狩野永納や尾形光琳の作例がある。多田羅多起子「狩野永納〈十二ヶ月歌意図屏風〉について―画域の拡大による新規需要への対応―」『美学』二二五号、二〇〇六年。

（5）伊藤香「Ⅰ家所蔵の月岡雪鼎筆「十二ヶ月図屏風」―月岡雪鼎と工房制作をめぐる問題―」『関西大学博物館紀要』第十三号、二〇〇七年

（6）特に、雪鼎の法眼期の古典人物画に関しては、当世風俗的要素が周到に排除され、やまと絵の伝統の原点へと回帰しようという志向があること、またその背景には江戸後期の考証学、さらには大坂の漢学者・国学者との接点も想定されている。前掲（1）山本氏論考参照。

（7）前掲（1）山本氏②論考。
（8）前掲（1）山本氏②論考。
（9）月岡派の工房制作については、前掲（5）伊藤氏論考参照。

本稿執筆にあたり、関西大学非常勤講師・伊藤香氏には、資料提供並びに多大なご教示を賜りました。ここに記して感謝いたします。また図版は、それぞれ左記の書から転載しました。

図3　『月次絵　十二ヶ月の風物詩』展覧会図録、滋賀県立近代美術館、一九九五年
図4　『関西大学所蔵大坂画壇目録』関西大学図書館、一九九七年